「日本語教育と地域・学生サポーターとの係わり」

"The Relationship between Japanese Language Education and Supporters at The University of Tokushima"

徳島大学留学生センター
大石寧子

ABSTRACT

There are two kinds of supporter systems at International Student Center in The University of Tokushima. One is called "Community Supporter" which consists of the people in the community of the university, and the other is "Student Supporter" that is composed of the students at The University of Tokushima. These activities have helped Japanese Language Education from the various aspects. We would like to review these activities and search the future relationship between Japanese Language Education and these activities at this moment where almost three years have passed since International Student Center opened.

1　はじめに

徳島大学留学生センターは、１）日本語教育、２）異文化交流、３）相談指導の３部門からなり、平成14年度秋に開所式が行われ、翌平成15年度春より始動した。

旧国立大学の留学生センターの中で、かなり遅く設立された留学生センターの日本語教育としては、特徴のある日本語教育の展開が必要と思われ、留学生センターが関わる全ての日本語教育やまたその全てのレベルで四技能（読む、書く、聞く、話す）の運用力を身に付ける、つまり「使える日本語」を目指すことを方針とした。勿論初級と上級、あるいは「予備教育」と全学部生対象の「共通教育での日本語・日本事情」とでは、その意味合いや到達目標も異なるが、知識に留まらず、習得した日本語を道具として持たせ、それぞれの目標を達成させるという視点での取り組み方は変わらず、共通の方針とした。

2　留学生センターの日本語教育

２．１　日本語教育の運営

現在留学生センター（以下センターとする）が行っている日本語教育は、①日

本語研修（大学院入学前予備教育）コース②日韓共同理工系学部留学生予備教育（以下日韓とする）③全学日本語（補講）コース④共通教育の「日本語・日本事情」がある。また、総合科学部の⑤「日本語教員養成に関する科目」中、日本語教育演習、日本語教育方法論１、日本語教授法Ⅱを非常勤教員的立場で現在まで係ってきている。①と②を、④と⑤を一つのくくりとして、３グループを３人の日本語教員がコーディネーターとなり担当し、２年ごとに交替していく。立ち上げ期の平成15年、16年を経て、少し落ち着いた今年度から日本語部門に上記のように発展的変更を加えた。また、日本事情の一部を異文化理解教育担当教員が、「日韓」の窓口役を生活相談担当教員が兼ねるなど可能なところは５人で係わり、運営するようにした。

２．２　「使える日本語」を支えるもの

２．１で述べた日本語教育の中でも、日本語研修コースと全学日本語コースは、初級者が多く、短い時間でいかに「使える日本語」を身に付けさせるかが大きな課題となる。この課題を乗り越えるために以下の点に着目した。

１）学習者にとって伝わる喜びが得られることは、大いなる学習の動機付けとなる。

２）「日本語研修コース」と「全学日本語コース」の学習者の殆どは、研究生・大学院生・研究者で、学部留学生に比べると年齢が高い。特に日本語研修コースは、その上に１日４時間半、週５日の授業である。授業に変化やアクセントをつけなければ、学習意欲を持続させるのが難しいのでは。

３）日本語学習中に日本語を学ぶと共に、日本人のマナー、ルール、文化、習慣、価値観、好みなどを学習項目を通して指導していくが、その実感を得る場が必要である。

４）昨今徳島では、各地の国際交流協会やボランティアグループをはじめ、地域の人々の中に異文化交流への関心が高まってきている。また徳島大学の日本人学生の中にも関心や興味があるのだがどうしたらいいのかわからないという学生が見られる。

５）日本語を教えてみたい、また指導法を勉強したのにその場がない、教え方は何も知らないが、何か手助けがしたいなどという人達へ場の提供ができないか。

等であった。そこでセンターが始動した１年目に地域の人々や徳島大学の日本人学生をセンターの日本語教育の「サポーター」という形で取り込み、日本語学習に動機付けや活気やアクセントを付けたいと試みた。そして以下の点をサポーターに期待した。

１）　教員の日本語だけでなく、少しでも多くのネイティブスピーカーの日本語を浴びる。

２）　表情、しぐさなどノンバーバルな部分での伝達方法を知る。

３）　地域の言葉（方言）や方言からくるイントネーションや表現方法を知る。

４）　学習した項目を使って、情報を取ったり、説明したりなど、伝わる喜びを実感する。

５）　学習している日本語を使って、日本人と協働ができる。

6）　日本人の知り合いができ、徳島で生活をしていく上での人的ネットワーク作りの一助になる。

一方、地域や日本人学生には、以下のような効果があるのではと考えた。

1）外国人と触れ合いたいと思ってはいるが、その方法がわからなかったり、気後れしたりということが、クラスに係わるということで大義名分ができ、一歩が踏み出せる。

2）留学生達に触れ合うことで、世界に目が向き、視野が広がる。

3）日本語教育機関の少ない徳島なので、日本語教育に関心や興味のある人達に場の提供ができる。

留学生、地域、日本人学生それぞれに有効性が高いと考え、留学生センターでの日本語授業開始と共に「サポーター」制度を発足させた。

3　センターの「サポーター」

サポーターは地域の人々を対象とした「地域サポーター」と徳島大学の学生を対象とした「学生サポーター」の２つのグループとした。

３．１　地域サポーターと学生サポーター

地域サポーターは、例年前期に留学生センター教員全員で係わる大学開放実践センターの公開講座「国際ボランティア入門－地域の外国人支援－」の受講者をはじめとし、新聞での呼びかけ、掲示、口コミなどの方法で募集する。また学生サポーターの場合は、説明会や学内の掲示、友人の紹介などで応募してくる。

センター開始より２年目には、地域サポーターが21名、学生サポーターが67名、計88名になったが、大所帯になると誰かが申し込むだろうと言う考えになり、それぞれの活動の参加に積極性が欠けたり、連絡に手間や時間もかかったりと全体的に動きの重さが目立つようになった。そこで、センターの立ち上げ期も終わり、更なる飛躍を試みる３年目の今年度、地域・学生サポーターの再登録を行なった。その結果今年度は、地域サポーター35名、学生サポーター22名、計57名で活動を行なった。

男女比は、地域サポーターは１：９、学生サポーターは２：８で、圧倒的に女性の参加が多い。地域サポーターの年齢は、20歳代から60歳代、学生サポーターは、院生１名、５年生(歯学部)１名、４年生２名、３年生８名、２年生10名である。

３．２　サポーターの活動状況

今年度の活動内容は以下のようで、活動数は16で、延べ参加者数は地域39名、学生46名、計85名であった。

表１　**2005**年度の「サポーター活動状況」

1	4/28	留学生センター	オリエンテーション・キャンパスツアー	学生サポーター	２名
2	5/12	日本語研修コース	文型練習	学生サポーター	２名

3	5/24	日本語研修コース	動詞の変換練習	学生サポーター	3名
4	6/29	共通教育「日本事情Ⅰ」	テーマについての調査相手	地域サポーター 学生サポーター	11名 5名
5 ＊	7/9	日本語研修コース	日本語を使っての各国料理作り ／セタパーティ	地域サポーター 学生サポーター	11名 6名
6	7月 中旬	日本語研修コース	日本語研修コースで遅れている 学生のケア	学生サポーター	3名
7	10/11	留学生センター	オリエンテーション・キャンパスツアー	学生サポーター	2名
8	11/8	共通教育「日本語4」	学習テーマについて日本人に聞く	地域サポーター 学生サポーター	7名 2名
9	11/25	日本語運用力のための パートナー探し	日本人と話す （～3月末　週1～2回　1時間）	学生サポーター	1名
10	12/5	全学日本語コース 日本語C1（常三島キャンパス）	「日本人と話す」	学生サポーター	2名
11	12/6	全学日本語コース 日本語C1（蔵本キャンパス）	「日本人と話す」	学生サポーター	5名
12	12/13	全学日本語コース 日本語C2（常三島キャンパス）	「日本人と話す」	学生サポーター	5名
13	1/12	共通教育「日本事情Ⅳ」	テーマについての調査相手	地域サポーター	6名
14 ＊	1/19	英語プレゼンテーション・ コンテスト	実行委員として運営	学生サポーター	2名
15 ＊	2/2	共通教育「日本事情Ⅳ」	「日本事情Ⅳ」発表及び懇談会	地域サポーター 学生サポーター	4名 1名
16	2/22	日本語研修コース	異文化体験 －各国料理交流会	学生サポーター	5名

＊　他に一般学生・地域の人も参加　　計　85名

各活動への参加方法は、各授業の担当教員がサポーター取りまとめ担当教員に申請し、それに基づいてそれぞれの活動内容に合わせて、地域サポーター、学生サポーターあるいは地域と学生サポーターに一斉メールで呼びかける。サポーターは都合のいい時に参加し、会費や義務・拘束はない。日本語授業そのものに係わる活動に参加する場合は、事前に担当教員よりその趣旨説明ややり方などの指導を受けクラスに参加する。

3．3　アンケート調査結果

今年度の活動が全て終了したところで、地域サポーターへアンケート調査を行なった。回答は12名で、以下のようである。

「地域サポーターの声」調査

1）　今年度活動に参加しましたか。

①　はい　　1回　　2名

２回　　２名
３回　　３名
４回　　１名
７回　　１名
８回　　２名

② いいえ　１名　→　登録して、まだ日が浅いので。

２）今年度の中で、面白かった活動は何でしたか。それはどうしてですか。（複数回答　可）

・日本事情Ⅰ、Ⅳ発表会及び懇談会　７名
・全学日本語コース「日本人と話す」　４名
・共通教育日本語４　「学習テーマについて日本人に聞く」　３名
・日本事情Ⅰ　「各自のテーマについての調査相手」　３名
・日本事情Ⅳ　「各自のテーマについての調査相手」　２名
・日本語を使っての各国料理作り　１名

３）皆様にお聞きします。これまで、このような活動をされたことが、ありますか。　注：人数記載のないものは、１名

① はい

・TOPIA　土曜日　日本語サロン（話し相手）　２名
・阿南市国際交流協会（日本語指導）
・吉野川国際交流協会（ホームステイの受入れ）
・JTMとくしま日本語ネットワーク、日本語サロン（話し相手）
・小松島国際交流協会（催物の窓口）
・ヒッポファミリークラブ（外国人妊産婦のケアー　病院紹介、用品提供等）
・板野町子ども教室
・徳大工学部日本語教室（ボランティア日本語指導）

② いいえ。徳大の地域サポーターが、はじめての経験　５名

４）どうして「徳大・地域サポーター」に登録しましたか。

・徳島大学の先生に勧められて
・友人に誘われて
・徳島大学大学開放実践センターの公開講座「国際交流ボランティア入門」（留学生センター運営）を受講して　２名
・留学中、現地の人と交流を通して地域理解、語学習得ができたので、その経験を活かしたい

５）今後、希望される活動や何か一言ありましたら、何でも結構ですので、是非お書きください。

・日本探検
・名所案内や日本文化紹介

・クリスマスパーティ
・留学生と学外に出たい－　例えば、お花見・お寺を訪ねる　　等
・地域サポーターが推薦する徳島名所案内
・ホームステイ講座・研修会を定期的にしては（年１回）
・日本語指導の機会
・同じ留学生と２～３度続けて話してみたい
・「日本語サロン」の常設化　－毎日は勿論、昼食時、土日、夜間も
・サポーターを幅広い年代で
・ネットワークを利用し徳島各地との交流を図る
・日本の文化（茶道、華道、歌　など）の紹介

学生サポーターの方は、後期の試験と重なったこともあり、回収率がはかばかしく無かったが、いくつかの声を拾うことができた。「徳島大学にこんなにいろいろな国の留学生がいたのかとびっくりした。」や「サポーターの活動のあと、国際交流会館へ友人と出向いて、その留学生とテニスをしたりして友人になった。」等のコメントもあった。

4　これからのサポーターとの係わり方

アンケートや聞き取り等の結果から、サポーターにとって印象のよかった活動は、日本事情Ⅰ·Ⅳクラスや共通教育日本語クラス、全学日本語コースのもので、いずれもあるテーマについて留学生が調査をするような授業内容で、単なるフリートーキングではない。プロジェクトワーク的なクラスの流れの中で、留学生の目的を達成するために日本語を使用して、共に作業を行なう、つまり協働の時間であった。

ここに今後の「サポーター」との活動の方向があると思われる。お客様的に留学生に物なり機会なりを提供するだけではなく、同じ立場に立って、共に協力し合い、何かを成し遂げる活動を来年度は更に充実させたい。この場合留学生にとって日本語獲得が最終目的ではなく、情報を得たり調査や検討をしたりするための道具に過ぎない。したがって「使える日本語」を何としても身に付けざるを得ないため、「サポーター」との協働は、日本語学習の強い動機付けとなる。

また３．３のアンケートの中で「今後望む活動」は、留学生と一緒にどこかを訪ねたり、集ったりというものが、多かった。まずは触れ合うという点や１回の催しで多くの人達を巻き込むという点では、このような活動も大切なことである。プロジェクトワーク的活動、催し物的な活動、いずれも真の異文化理解の上に成り立っていれば、非常に有効なことである。

留学生センターは、今日まで「地域·学生サポーター」を含め、地域との係わりの中で「異文化理解」に取り組んで来たが、さらに地域の異文化に対する理解や成長を促すためにワークショップや研修会などの機会を提供することもセンターの早急な仕事だと思える。大学は地域に根ざし共に成長する、ここでもまさに協働を行ないながら、今ある地域の情熱を実のあるいい方向へ更に飛躍させたい。

「サポーター」は、その意味でも頼りになる牽引者なるであろう。

5　おわりに

日本語教育のサポーターとして発足した「地域・学生サポーター」であるが、センター主催の「英語プレゼンテーションコンテスト（旧英語スピーチコンテスト）」の運営をはじめ日本語教育に留まらずその活動の幅を広げつつある。センターの始動当初には、はっきりつかめていなかった地域との係わり方が３年経ち、見え始めてきた今、センターは地域とのより有効的な係わり方の考察を続けて行きたい。

参考文献

J.V.ネウストプニー（2002）「インターアクションと日本語教育－今何が求められているか－」『日本語教育』**112** 号
J.V.ネウストプニー（1995）「新しい日本語教育のために」大修館書店
西口光一(1999)「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」『日本語教育』100 号
倉八順子（2001）「多文化共生にひらく対話」明石書店
縫部義憲編（2002）「多文化共生時代の日本語教育」瀝々社